園長だより「しつけとしむけ」　第 24 号

私を含めて、たいていの保護者の皆さんはわが子の「しつけ」をする時に「〇〇してはいけません」「〇〇しなさい」というような命令形が多いようです。ただ、子どもはもともと反逆性を持っています。いったんはその命令や禁止に従いますが、そのうちに背反してやらなくなったり、守らなくなったりするものです。

そうなると保護者としては親の権威が傷つけれられたということになり、結果的に「怒る」ということになります。この繰り返しが「しつけとは怒ることなり」となってしまう原因です。

これでは本来「しつけ」という言葉の中にあるべき「しむけ」が疎かになっているような気がします。子どもを後ろから追い立てていくような「しつけ」と違って、「しむけ」とは保護者がわが子に良き範を示しながら、後ろから付いてこさせるということです。もしもお子さんがへこたれて、遅れてしまったら、その時こそ叱ればいいのではないでしょうか。「怒る」というのは保護者のエゴが多いですが、「叱る」というのは子どもに対する励ましになります。

しつけ（躾）　　礼儀・作法など生活に必要な良い習慣を身に付けること。

国語辞典で「しつけ」はこのように説明されています。人として生きていく上で必要なもの。つまり「必ず要る」ものなのです。公共の電車やバスの中で騒いだり、スーパーマーケットの中を走り回ったりすることが良くないということを子ども達は知りません。だから、私たち大人がなぜその行為が良くないのかを説明し、教えていかなければいけないことですね。ここで大切なのはなぜいけないのかという理由をしっかり理解させることです。「ほら、あそこのおじさんが怒ってはるから静かにしなさい。」「お店の人に怒られるから走ったらあかんよ。」これは最悪のしつけです。おじさんが怒っているから静かにするのではありませんし、お店の人に怒られるから走らないのではありませんね。まだ子どもだからと許されることもありますが、礼儀やマナー等は幼いうちから身に付けさせることが大切です。お子さんがやらかしてしまったときがチャンスです。お子さんとしっかり向き合い、分かりやすい言葉で良くなかった理由を教えてあげてほしいと思います。それを繰り返し、繰り返し続けていくことでお子さんは人として大切な習慣やマナーを身に付けていくことになります。

以前、電車に乗っていると高校生が５人乗りこんできました。彼らはずいぶん大きな声でおしゃべりをし、大きな声で笑いました。校章を見ると名の知れた進学校でした。「見える学力の偏差値は高いけれど、見えない学力の偏差値は低い。」ということですね。その車内で残念な気持ちになったのは私一人ではなかったと思います。